

意外に知られていない!?

琵琶湖のアユの生態



琵琶湖に生息する“**湖産アユ**”は、日本各地に広く生息する“**海産アユ**”とは異なる生活史をしている。



“**海産アユ**”は秋に河川で生まれた後、海まで流下する。流下したアユは秋から冬の間、動物プランクトンを食べして生活する。春になると全ての個体が河川に遡上し、石に付いた藻類を食べして生活するようになる。その後、秋に河川の下流域に移動して産卵し、1年で一生を終える。

“**湖産アユ**”は秋に琵琶湖流入河川で生まれた後、直ちに琵琶湖に流下する。流下したアユは秋から冬の間、琵琶湖で動物プランクトンを食べして成長する。その後、大部分の個体は産卵までそのまま琵琶湖で生活が続ける。これらの個体は動物プランクトンを主食にしているため、**成魚でも体長 8cm程度と小型であることから“コアユ”と呼ばれる。**

そのため、“コアユ”が食べられるのは滋賀県だけ!!



水産技師
谷口 皆人 主査

Profile

担当:アユ資源調査

好きな魚:食べられる湖魚

水産試験場アユ担当

にきく・・・

～知られざる水産試験場の魅力とは～

滋賀県の水産業の未来を

様々な視点から考える

それが仕事の魅力

アユの資源量を調べる

晩夏から秋にかけては産卵調査、秋から冬にかけてはヒウオ生息状況調査、1月からは調査船「琵琶湖丸」に乗船して魚群探知機を使った調査等を実施して、これらの調査結果に基づいて総合的に琵琶湖全体のアユの資源状況を評価しています。

また、漁師さんが獲ったアユの体型を測定して、成長度合いも調べています。ヒウオ生息状況調査で採集したヒウオ（アユの子ども）から耳石という人間にもある**平衡感覚を司る器官**を取り出し、1日ごとにできる日周輪を数えることで、そのアユがいつ生まれたか（ふ化日）を特定することができます。調査で採集したアユのふ化日の組成を把握することで、漁期や漁法ごとの漁況を予測することにも取り組んでいます。



仕事の魅力とやりがい

もともと滋賀県出身で、幼い頃から琵琶湖に触れてきたので、滋賀県で水産の仕事がしたいという漠然とした思いがあり、漁業だけでなく、養殖業や水産加工業、河川漁業と幅広く滋賀の水産に関われる仕事に憧れていました。水産の中でも、淡水魚を対象にした研究が出来るというところは、実は全国的にも少ないんです。

去年からアユの担当になりましたが、その年は過去に例がないほどの不漁に見まわられて・・・実は、アユがよく獲れる年をまだ経験したことがないんです。獲れない原因は何か、また、それに対応した今後の県や水産試験場の取り組みや対応等について、漁業関係者や他の自治体から注目されています。

そこで、自分たちで調査設計を考え、実際に調査を行い、その成果をもとに、今後の方針に関係者と共に考えています。大変なこともたくさんありますが、自分の仕事が「**滋賀の水産業の未来**」に繋がると思いながら仕事していますし、やりがいはそこですかね。あと、何より魚に日々、触れることが楽しいです。私に限らず、水産技師は魚や琵琶湖に触れていないとダメな人たちばかりなのでw

日周輪間隔の
大きさは約 0.02mm!

耳石(じせき) ⑤



アユの耳石には木の年輪のようなリングがあり、1日1本ずつ形成されます。これは日周輪と呼ばれています。顕微鏡で日周輪を解析することでふ化日の他に、成長の速度等も分かり、アユの生態研究に利用しています。繁忙期は、1日中、日周輪を数えて、気づけば夜になっていることも!

琵琶湖の水産資源管理の流れ

